

Concerto Zefiro

Claudio Monteverdi (1567-1643)

Madrigali Libro Ottavo
1638

Guerrieri et Amorosi



Concerto Zefiro

クラウディオ・モンテヴェルディ (1567~1643)

“戦いと愛のマドリガーレ” (1638)

2つのヴァイオリン、通奏低音を伴う6声のマドリガーレ

2003年10月11日(土) 18:30

長泉町文化センター ベルフォーレ イベントホール



CANTI GUERRIERI

戦いの歌

Sinfonia

シンフォニア

Altri Canti d'Amor

他の人々は愛を歌っているが

a 6 voci con quattro viole e doi violini

4つのヴィオラと2つのヴァイオリンを伴う6声

Hor che'l ciel e la terra e'l vento tace

今や天も地も風も静まりかえり

Così sol d'una chiara fonte viva

こうして輝かしい泉があふれ出て

a 6 voci con doi violini

2つのヴァイオリンを伴う6声

BALLO

舞踏

Introduzione al ballo

舞踏への導入

Movete al mio bel suon

私の美しい楽の音にあわせ踊る

Balletto (Biagio Marini)

バレット(舞曲) ピアジョ・マリーニ作曲

Ei l'armi cinse

武装して軍馬に乗り

a 5 voci con doi violini

2つのヴァイオリンを伴う5声



CANTI D'AMOR

愛の歌

A Dio Roma ("L'incoronazione di Poppea")

さようならローマ (オペラ「ポッペアの戴冠」)より

voce sola

独唱

Sonata Prima (Biagio Marini)

ソナタ第1番 ピアジョ・マリーニ作曲

Chiome d'oro (Libro VII)

黄金色の髪 (第7巻)

Canzonetta a 2 voci Concertata da duoi violini

2つのヴァイオリンと合奏する2声のカンツォネッタ

Non havea Febo ancora

まだ夜の明けぬうちから

Amor (Lamento della Ninfa)

愛よ (ニンファの嘆き)

Si tra sdegnosi

この憤慨の涙の中で

a 4 voci:canto, doi tenori e basso

ソプラノ、2テノールとバスによる4声

Dolcissimo uscignolo

最も美しい夜鶯(ナイチンゲール)が

a 5 voci, cantato a voce piena, alla francese

5声によるフランス風の歌

Sinfonia (Libro VII)

シンフォニア (第7巻)

Altri canti di Marte

他の人たちは戦いを歌っているが

Due belli occhi

二つの美しい眸が

a 6 voci et doi violini

2つのヴァイオリンと6声



Claudio Monteverdi (1567-1643)

北イタリアのクレモナに生れたモンテヴェルディは、ここで伝統的なルネッサンスの作曲技法を学んだ後、1582年に「マドリガーレ第1巻」を出版する。1590年にゴンザガ公の治めるマントヴァ公国の宮廷音楽家として仕えることになった。このマントヴァの宮廷は、多くの優れた詩人、画家、音楽家、歌手などが仕えており、モンテヴェルディはこのような人たちに触発されて、優れた作品を多く作曲した。

1592年に「マドリガーレ第3巻」を出版する。モンテヴェルディのルネッサンス的作曲技法によるマドリガーレはこの第3巻までで、1603年に出版された「マドリガーレ第4巻」は大胆なバロック的技法を含むものになった。

ルネッサンスの「静」に対してバロックは「動」ということがいえる。バロック音楽ではルネッサンス音楽には見られない、激しいダイナミックの変化、急速なテンポの変化がみられる。

ルネッサンスの声楽曲の特徴は、均整のとれた美しさ、美しい協和音、多声的であることである。ルネッサンスの多声的な声楽曲は言葉が不明確になりがちであったが、人間の真実の思いを表現しようとしたバロックの声楽曲は言葉を重視し、歌詞を明確にするため音楽は和声的になり、悲しみや怒りの気持ちを表現するために、大胆な不協和音が多く用いられた。こうして言葉を喋る、言葉の意味を伝える、ということを中心にしたモノディという歌の形式が生れた。このモノディがバロックオペラを誕生させる源となった。

そのような様式を完成させたのがモンテヴェルディであった。「マドリガーレ第4巻」では激しい音のぶつかり合いなど、劇的表現が用いられた。保守的なある理論家はこのモンテヴェルディの曲を伝統を無視したものと非難したが、モンテヴェルディは2年後に「マドリガーレ第5巻」を出版し、この序文で、「従来の作曲法は<第一技法>(prima prattica)であり、この新しい作曲法は<第二技法>(seconda prattica)によるものである」としてこの非難に応酬した。この第5巻では、バロック音楽のもう一つの特徴である「通奏低音」付きのマドリガーレも含まれていた。

1614年すでにマントヴァからヴェネツィアに移り、サンマルコ聖堂の楽長となったモンテヴェルディは5声のマドリガーレ集としては最後になる「マドリガーレ第6巻」を出版し、当時大評判のモノディ「アリアンナの嘆き」を、5声のマドリガーレとしてこの中に含めた。ここでも激しい音のぶつかり合いや、感情表出が聴かれるのはモノディの「アリアンナの嘆き」と同様である。

1619年の「マドリガーレ第7巻」はCONCERTO(声楽・器楽のコンサート、声楽・器楽のアンサンブル)と題がついている。ここではルネッサンス的なマドリガーレの技法はみられず、独唱、二重唱から6声の合唱まですべて通奏低音が書かれており、完全にバロック技法のマドリガーレ集となった。

本日演奏される曲では、2つのヴァイオリンと通奏低音を伴う二重唱である「Chiome d'oro」、後半に演奏される「Sinfonia」がこの第7巻にふくまれる。

1638年に出版された第8巻は作曲年代は様々であるが、全体として革新的な、それ以前に類を見ない音楽集である。

Madrigali Guerrieri et Amorosi「戦いと愛のマドリガーレ」(madrigaliはmadrigaleの複数形)という題がつけられているが、「戦い」と「愛」という全く対立するもの、これぞバロックである。愛の部分のやさしい、美しいメロディーと、戦い部分の速いパッセージ、ぶつかり合う音、このコントラストの強さはバロック音楽の特徴のひとつである。

この第8巻にはヴァイオリン、ヴィオラ、コントラバス等の多くの楽器を伴う6声ないし7声の曲を多く含んでいる。殆ど小さなオペラとも思われる「タンクレディとクロリンダの戦い」や、実際に上演されたと思われるオペラ風のバレエ音楽(今日のバレエとは違うが)Ballo2曲なども含む。2曲の「フランス風」と書かれた曲のみがルネッサンスのシャンソン風の曲で、かなり以前に作曲されたものであろう。

「第二技法」といってきたモンテヴェルディの大胆さと創造力、それが音楽史上に輝く傑作、オペラ「オルフェオ」「ポッペアの戴冠」や「聖母マリアの夕べの祈り」、そしてこの「第8巻」を生み出し、バロック音楽の最盛期につながるのである。

(市川行洋)

ピッチ(音高)について

現代ではA=440Hzというのが標準ピッチとなっている。このピッチが世界的に標準とされたのは20世紀前半のことである。19世紀には地域により435Hz、440Hzが使われていた。

さらにさかのぼると、そもそも「標準」という考え方がなかったように思われる。地域により、時代により様々なピッチが用いられた。

現在、古楽といわれる分野で使われているピッチは、たいへんおおまかにいうと次のようになる。これ以外の中間的ピッチが使われることもある。

466Hz(標準より半音高い) 初期イタリアバロックなど
440Hz(現代の標準) 初期イタリアバロック、スペインなど
435Hz モーツァルトなど

415Hz(標準より半音低い) 一般に古楽で多く使われている
392Hz(標準より全音低い) フランスバロック、バッハの一部
本日の演奏は440Hzを採用している。

音律について

今日多く使われている平均律は、1オクターブの12の半音を全く均等に分けたもので、19世紀後半から使われた。能率的で便利な反面、3度の和音がかなり不協和音になるとか、調が変わっても音階の幅が同じなので、音高以外は変わった感じがしないという欠点もある。

バッハの時代に使われたキンベルガーとかヴェルクマイスターの調律法では各半音の幅が違うので、調が変わると音色も変わる。そこに平均律クラヴィア曲集のおもしろさがあるのである。

本日の演奏では16世紀前半に考案されたミーントーンを採用している。3度の和音が協和音となるのが特色で、3度を重視するルネッサンス・初期バロック音楽で多く使われている。

歌詞対訳：以下の訳は歌うために訳したもので、文学的なものではありません。あくまで参考にご覧ください。
原文(イタリア語)と同じ行内で訳しているため日本語として語順がおかしな場合もあることをご承知ください。
原詩は4行4行3行3行というソネット形式で書かれているものが多いです。脚韻に注目してください。

Altri canti d'Amor

anonimo

Altri canti d'Amor, tenero arciero,
i dolci vezzi e i sospirati baci,
narri gli sdegni e le bramate paci
quand'unisce due alme un sol pensiero.

他の人たちはアモール(愛の神)を歌っている、やわらかい弓と
甘いしぐさとため息の接吻を
言い争って和解を求め
そのとき二つの心は一つの考えに結ばれる

Di Marte io canto furibondo e fiero
i duri incontri e le battaglie audaci.
Strider le spade e bombeggiar le faci
fo nel mio canto bellicoso e fiero.

(一方)私はマルテ(戦争の神)を歌う、怒り、荒々しく
厳しく対立し、大胆に戦う
剣を打ち合い、爆弾を投げる
私の美しく荒々しい歌で

Tu cui tessuta han di cesareo alloro
la corona immortal Marte e Bellona,
gradisci il verde ancor novo lavoro,

あなたは皇帝の月桂樹を編む
不死のマルテとベローナ(戦いの女神)のための
仕事を喜んで繰り返している

che mentre guerre canta e guerre sona,
oh gran Fernando, l'orgoglioso choro
del tuo sommo valor canta e ragiona.

戦いの歌と戦いの音が続く間
ああ偉大なるフェルナンド、誇り高き合唱が
あなたの崇高な価値と理性を歌う

Hor che' l ciel e la terra e' l vento tace

Francesco Petrarca (1304-1374)

Hor che' l ciel e la terra e' l vento tace
e le fere e gli augelli il sonno affrena,
Notte il carro stellato in giro mena
e nel suo letto il mar senz'onda giace,

今や天も地もそして風も静まり返り
獣も小鳥も動かず寝ている
夜が星の天空を回している間
そして海が波も無く寝床についている間

Voglio, penso, ardo, piango e chi mi sface
sempre m'è innanzi per mia dolce pena.
Guerra è il mio stato, d'ira e di duol piena,
e sol di lei pensando ho qualche pace.

私は眠らず、考え込み、情熱に燃え、泣く、そして
その女が私が悲しむ間いつもいて、私を駄目にする
私は戦争状態だ、怒りと嘆きに満ちて
彼女のことを考えるときだけが安らぎのとき

Così sol d'una chiara fonte viva
move il dolce e l'amaro ond'io mi pasco.
Una man sola mi risana e punge.

こうして一つの輝く活潑な泉が
その甘く苦い水で私を満たす
一つの手だけが私を癒し突き刺す

E perchè il mio martir non giunga a riva,
mille volte il di moro e mille nasco,
tanto dalla salute mia son lunge.

そして私の苦痛が決して終わらないように
日に千回も死に、千回も生まれる
私が解放されるのは遠い先

BALLO

Volgend il ciel

Ottavio Rinuccini (1562-1621)

Entrata & innanzi al ballo
Volgend il ciel per l'immortal sentiero
le ruote de la luce alma e screna,
un secolo di pace il Sol rimena
sotto il Re novo del Romano Impero.

入場と踊りへの導入
不滅の道を通り天空に向かう
光の車輪が回る、魂からの静かな
太陽が持ち帰る平和の時代
ローマ帝国の新しき王のもとに

Su, mi si rechi omai del grand'Ibero
profonda tazza inghirlandata e piena,
che, correndomi al cor di vena in vena,
sgombra da l'alma ogni mortal pensiero.

それから私に届けよ、偉大なるイベリアからの
深いカップを、それは花で飾られいっぱいになっている
それはわたしの心に次々と流れてくる
私の魂からすべての死の考えを取り除く

Venga la nobil cetra, il crin di fiori
cingimi, o Filli, io feriro le stelle
cantando del mio Re gli eccelsi allori

高貴なる竖琴よ来て、髪は花で
飾ってくれ、フィーリよ、私が星を傷つけられるよう
王の優越を歌うことによって

E voi che per belta, donne e donzelle,
gite superbe d'immortali honori,
movete al mio bel suon le piante snelle,

sparso di rose il crin leggiadro e biondo.
E lasciato dell'Istro il ricco fondo,
vengan l'humide Ninfe al ballo anch'elle.

BALLO

Movete al mio bel suon le piante snelle,
sparso di rose il crin leggiadro e biondo.
E lasciato dell'Istro il ricco fondo,
vengan l'umide ninfe al ballo anch'elle.

Fuggano in si bel di nemi e procelle:
d'aure odorate el mormorar giocondo. [de l'onde]
Fat'eco al mio cantar rimbombi il mondo
L'opre di Ferdinando eccelse e belle.

BALLETTO

SECONDA PARTE DEL BALLO

Ei l'armi cinse e su destrier alato
corse le piaggie, e su la terra dura
la testa riposo sul braccio armato.

Le torri eccelse e le superbe mura
al vento sparse e fe' vermiglio il prato,
lasciando ogni altra gloriola al mondo oscura.

そしてあなた方ご婦人たち、娘さんたちが
その美しさで不滅の名誉を誇り
すらりとした足を私の美しい音楽に合わせて動く

その美しい金髪に薔薇の花を撒き散らし
そしてイストリアの深い底からはなれ
水の妖精が踊りに来るようにしよう

踊り

すらりとした足を私の美しい音楽に合わせて動く
その美しい金髪に薔薇の花を撒き散らし
そしてイストリアの深い底からはなれ
水の妖精が踊りに来るようにしよう

雲や嵐を追い散らしたこの良き日
香を放つそよ風が楽しくそよそよと吹く
私の歌がこどまし、世界に響く
優れた良きフェルディナンドの行いとものに

バレット(舞曲)

踊り第二部

武具を装備し、軍馬は側にいる
地を走り、大地の上にいる間
武装した腕の上で頭を休める

高いやぐらと自慢の城壁に
風が吹き、大地を赤く染め
この世の他のすべての栄光を暗くする

Lamento della Ninfa

Ottavio Rinuccini

Non havea Febo ancora
recato al mondo il di
ch'una donzella fuora
del proprio albergo usci.

Sul pallidetto volto
scorgeasi il suo dolor.
spesso gli venia sciolto
n gran sospir dal cor.

Si calpestando fiori
errava hor qua hor là,
i suoi perduti amori
così piangendo va:

Amor, dicea
Amor, il ciel mirando
il piè fermò.

Amor, Amor,
dov'è la fè
che'l traditor
giurò? miserella

Fa che ritorni il mio
amor com'ei pur fu,
o tu m'ancidi ch'io
non mi tormenti più.
miserella ah più, no,
tanto gel soffrir nonpuò

フェーボ(太陽神)は未だ
日の光をこの世界に運んでない
若い娘は外へ
自分の家から出た

その青ざめた顔の上に
彼女の悲しみが見て取れる
彼女は何度も
心からの深いため息をついた

彼女は花を踏みつけ
あちこちとさ迷い歩いた
彼女の失われた恋
悲しいお話はこのように

愛
愛
彼女は言った
空を見上げ
彼女は足を止めた

愛よ、愛よ
誠実はどこなの
あの裏切り者が
誓った
かわいそうに

戻ってきてほしいあの方
かつてのように
そうでなければ私を殺して
私をこれ以上苦しめないために
かわいそうに、これ以上
冷たさに耐えられるだろうか

Non vo'più ch'ei sospiri
se non lontan da me:
no, no che i suoi martiri
più non dirammi affè.

ah miserella
ah più no no

erchè di lui mi struggo
tutt'orgoglioso sta,
che si, che si, se'l fuggo
ancor mi pregherà.

miserella ah più, no,
tanto eloffrirnonpuò

Se ciglio ha più sereno
colei che 'l mio non è,
già non richiude in seno,
amor, si bella fè.

miserella ah più, no,
tanto gel soffrir non può

Nè mai si dolci baci
da quella bocca havrà,
nè più soavi...ah, taci,
taci, che troppo il sai.

miserella

Si tra sdegnosi pianti
spargea le voci al ciel,
così ne'cori amanti
mesce amor fiamma e gel.

私はこれ以上彼のささやきを望まない
彼が遠くへ行ってしまおうでなければ
いえ、彼がこれ以上私を

苦しめることを言わないように ああ、かわいそうに
もうこれ以上

だって、私は彼のためにだめになってしまう
彼は誇りに満ちている
だけど、もし私が彼から逃げれば
彼はまた私に請い願う

かわいそうに、これ以上
冷たさに耐えられるだろうか

もしあの女の人が私より
きれいな顔を持っているとしても
彼女の心には私より
美しい愛の心をもっていないわ

かわいそうに、これ以上
冷たさに耐えられるだろうか

あれ以上甘い口づけはないわ
彼のあの唇の
あれ以上やさしい...ああ静かな
静かな、それを彼はわかっている

かわいそうに

このように憤慨の涙の中で
彼女は天に向かって話した
愛する心の中で
愛が炎と氷を混じり合わせていた

Dolcissimo uscignolo

Giovanni Battista Guarini

Dolcissimo uscignolo,
tu chiami la tua cara compagnia
cantando: "Vieni, Vieni, anima mia!"

最も優雅な夜鶯
あなたはあなたの親しい仲間によびかけ
歌う:「来て、来て、私の命よ」

A me canto non vale
e non ho come tu da volar ale.

その歌は私には何の意味も無いし
あなたのところへ飛んでいく翼も無い

O felice augelletto,
come nel tuo diletto
ti ricompensa ben l'alma natura:
se ti negò saper, ti diè ventura.

ああ幸運なる小鳥よ
何とあなたの喜びであることか
自然があなたに与える本能は
もしあなたが何も知らないなら、あなたは幸運を得る

Altri canti di Marte

Gian Battista Marino (1669-1625)

Altri canti di Marte e di sua schiera
gli arditi assalti e l'onorate imprese,
le sanguigne vittorie e le contese,
i trionfi di morte horrida e fera.

他の人たちはマルテ（戦い）とその軍隊を歌う
勇敢なる攻撃と名誉ある偉業をなしとげる
それは血なまぐさい勝利、争い
恐ろしく激しい死の勝利

Io canto, Amor, di questa tua guerriera
quant'hebbi a sostener mortali offese,
com'un guardo mi vinse, un crin mi prese,
historia miserabile ma vera.

（一方）私はアモール（愛）を歌う、あなたの（女）戦士からの
瀕死の傷がどれほどであろうとそれを耐える
視線が私を圧倒し、髪はわたしの心を奪う
悲しいが本当の話

Due belli occhi fur l'armi onde trafitta
giacque, e di sangue invece amaro pianto
sparse lunga stagion l'anima afflitta.

美しい二つの眸という武器により傷を負い
横たわる、そして血の代わりに愛の涙を
撒き散らし、長い間心を苦しめる

Tu per lo cui valor la palma e 'l vanto
hebbe di me la mia nemica invitta,
se desti morte al cor, da vita al canto.

あなたの勇気で、勝利と誉れを
私の見えない敵が得た、
もし私の心に死を与えるなら、私の歌に命をください

（市川行洋）

Concerto Zefiro

コンチェルト ゼフィロの前身である「みどり会合唱団」は、1951年に杉山一郎氏により創立され、当時としては珍しくルネッサンスの宗教曲やマドリガルをレパートリーに加えていました。その後、指揮者は市川行洋に引き継がれて、ルネッサンスのア・カペラの宗教曲やマドリガルを主として歌ってきましたが、1992年より古楽器による通奏低音を加え、レパートリーに初期バロック作品を含めるようになりました。現在では合唱団というより、1パートが1～2名の少人数によるヴォーカルアンサンブルとして活動しています。

つのだたかし氏、波多野睦美氏、牧野正人氏から発声法、歌唱法などの指導を受け、また各メンバーが各種の古楽セミナーに参加するなど、ルネッサンス・バロックの時代にふさわしい演奏様式や発声法を追求しています。

また、バロック音楽に欠かせない通奏低音奏者として、古楽コンクール第一位を獲得し地元沼津に拠点を定め活動しているチェンバロ奏者の杉山佳代を中心に、ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者の穴山徹(小田原市)、リュート奏者の西野潤一(岐阜市)もメンバーとして活動しています。

全国の多くの友の支援を受けてコンチェルト ゼフィロは成立しています。今回バロックヴァイオリン奏者として加わった、丹沢広樹氏(富士市)、なかやまはるみ氏(横浜市)もそのような協力者の方々です。また、いつもプログラムの表紙やポスターの美しいイラストを描いていただいているのは銅版画家の林由紀子氏(三島市)です。

本日も来演になったお客様のご存在を忘れるわけにはいきません。聴いてくださる方があってこそその演奏、私たちが好きな歌を歌えるのは聴いてくださる方があるからです。ありがとうございました。

ゼフィロはギリシャ神話の西風の神ですが、イタリア語で西風をも意味します。ヨーロッパで春の訪れを告げる柔らかなそよ風です。イタリアのルネッサンス大詩人ペトラルカの詩 *Zefiro torna* (西風が戻ってきて)にちなみこの名称をいただきました。モンテヴェルディのマドリガーレ *Zefiro torna* はこの詩によるものです。

- | | |
|----------------|--|
| 1992年10月31日(土) | 「ダウランドとその周辺」 バレストリーナ、ダウランドの作品
杉山佳代(チェンバロ)、ヴィオラ・ダ・ガンバのコンサート |
| 1993年10月9日(土) | 「チューダー朝の音楽」 タヴァナー「西風のミサ」、ダウランド
杉山佳代(チェンバロ) ガンバコンサート(松永直人、他) |
| 1994年10月22日(土) | 「巡礼の慰め」 ダウランド、マレンツィオ、モンテヴェルディ
杉山佳代(チェンバロ) 松永直人(ガンバ) |
| 1998年5月1日(金) | 「コンチェルト ゼフィロ」と団の名称を改称 |
| 1999年5月1日(土) | 「アリアンナの嘆き」全曲他、モンテヴェルディのマドリガーレ
リュート奏者につのだたかし氏を迎える |
| 2001年11月18日(日) | 「スペイン黄金時代の歌」 宮廷の歌曲集、カラブリア公爵家の歌曲集
杉山佳代(チェンバロ/オルガン) 穴山徹(ガンバ)
西野潤一(ルネッサンス・ギター) 中川睦雄(サズ) |
| 2003年6月28日(土) | 「戦いと愛のマドリガーレ」 三島カトリック教会創立50周年記念演奏会 |
| 2003年10月11日(土) | 「戦いと愛のマドリガーレ」 長泉町文化センターベルフォーレ イベントホール |

Sop 服部礼子
Mez 伊熊公子 / 和部幸代
Alt 本田美子 / 真鍋 匡
Ten 田代憲孝 / 太田正洋
Bass 吉田 宏 / 市川行洋

バロック・ヴァイオリン 丹沢広樹 / なかやまはるみ
キタローネ 西野潤一
ヴィオラ・ダ・ガンバ 穴山 徹
チェンバロ/オルガン 杉山佳代
指揮 市川行洋

イラストレーター：林由紀子



Concerto Zefiro

Concerto Zefiro

411-0022 三島市川原ヶ谷 212 Email : zefiro@zefiro.jp <http://www.zefiro.jp/>